

# 華嚴の浄土

中 村 薫

## 一 はじめに 〔仏陀華嚴〕

こんにちは。今回、福田先生、安藤先生よりお誘いを受け、心より喜んでまいりました。およそ一年半ぶりにごうした講義をさせていただきます。本日は『華嚴経』というのは一体どういう経典なのか、ということを中心にお話させていただきます。

実は私、このごろ百五十日間ほど寝たきりでおりまして、やっと起き上がって歩けるようになりました。そうしたら不思議なことに、勉強の意欲が出てまいりました。それで今『無量寿経』の三毒五悪段、これがどうして『無量寿経』に載せられているのか。それも古本、古い翻訳（『平等覚経』『大阿弥陀経』）のみに載っており、新しいものに載っていないのはなぜか、サンスクリット本にも載っていない、チベット訳にもない、その三毒五悪段が、なぜ漢訳のなかに入っているのか。そのことが今、私の課題になっておりまして、あちこちの文献を調べておりま

す。

ただ、五十年も前ならば非常に元氣もあったので、図書館へ行って色々な文献を探して、大正藏經を何時間とかけて読んで出典を搜したり、そういう根氣がありましたけれど、今はなくなりました。でも今はいろいろ電子化されておまして、インターネットなどで調べると全部データが出てきますので、それで横着をして、藤村潔先生、藤原智之氏に「この所をちょっと搜してくれ」と頼みまして、「この用例はいくつあるか数えてほしい」「親鸞聖人は『大無量寿經』をどれだけ引用しているか、その数を数えてほしい」とか、そういうことはお願いしております。その上で、親鸞はなぜ「真実の教を顕さば、すなわち『大無量寿經』これなり」と言ったのか、そういう課題に取り組んでおりまして、『無量寿經』に関する書物を取り寄せて、いま本の中に埋まっております。まだ整理も何もできておりません。あちこち読みまわして、まあ五年ぐらいの間には、なんとか整理をつけて論文にならないかな、と思っております。

そういう状況で、自分ではだんだんと、文献学的な細かい仕事ができなくなりました。今日のこのお話も大雑把な話になるかもしれません。大学院の方には少々物足りないかもしれませんが、そこは少し辛抱していただいて、今日は一般の方もたくさんお見えですので、みなさんにお分かりいただけるよう話すつもりです。お手元にお配りした資料は以前、一般の読者向けに、様々な先生がそれぞれ『華嚴經』について書かれた特集の中で、私が「華嚴經とは一体どういう經典なのか」ということを書かせていただいたものです（中村薫「華嚴經とは」月刊『大法輪』二〇〇二年一〇月号「特集 華嚴經入門」掲載）。これを参考にしながらお聴きいただければと思います。

## 二 文化を包含する雄大さ

『華嚴經』の正式な名称は『大方広仏華嚴經』といます。「大」とは「包む」という意味。私はずっと仏教学を学んできて、真宗学は素人だったものですから、『大無量寿經』という呼び方は親鸞から始まっているということに最近になって知りました。本当は『無量寿經』です。それを親鸞は『大無量寿經』これなり」と「大」という字を入られた。それで真宗ではお西もお東も、十派含めて『大無量寿經』と言っております。「大」とは、方々包む、すべてのものを包み込む、という意味で、大きいことですね。そして「方」というのは、これは曇鸞大師が言っておられますけれども、「実直」まっすぐなこと。「広」というのは「深広」深くて広い、計りしれないこと。

それで「大方広」です。「華嚴」というのは、華で莊嚴するということであり、莊嚴されたところを歩んでゆく菩薩道ということです。主語は仏です。『華嚴經』のテーマは何かといえは「仏とはなんぞや」ということです。たとえば『無量寿經』のテーマは「本願」でしょう、四十八願。そして『涅槃經』はニルヴァーナ、「涅槃」でしょう。それぞれの經典にはそれぞれの課題があります。『華嚴經』の場合は「仏とは何ぞや」それがテーマです。

その「仏」とは毘盧遮那仏です。これが如来になると大日如来。では我々の浄土教はどうかというと、釈迦仏、そして阿弥陀如来。ここにもそれぞれ特色があるわけです。毘盧遮那仏は「光明遍照」という。月とか太陽の光は影をつくります。しかし光明遍照ですからその光は障りない、どこまでもまっすぐ届く。どんな片隅にいる人の所

へも届いてゆく。光明遍照、これが毘盧遮那仏。このように理解して、『華嚴経』は、詳しくは『大方広仏華嚴経』という。そうご理解いただけたらありがたいです。

その『華嚴経』は、日本の文化の中でどのように知られているか。たとえば栃木県の日光に「華嚴の滝」という滝があります。他にも「阿含の滝」とか色々ありますけれども、その華嚴の滝に、明治時代、東大生、当時は旧制一高生だった藤村操氏が、「人生不可解なり」といって飛び込んで自死してしまった。それから数年の間に、未遂も含めると百数十名もの人が後追いついていったそうです。藤村操が飛び込んだので、その後追いついて、助かった者もあるし、死んでしまった人もあります。当時の若者たちが、人生不可解なりという言葉に動かされ、その華嚴の滝へ飛び込んでいった。そのために「華嚴」という言葉が多くの人に知られるようになったそうです。

それから文学の例を挙げますと、十返舎一九の『東海道中膝栗毛』。弥次さん喜多さんの東海道五十三次の歴訪、これが『華嚴経』の「入法界品」、つまり最終章の善財童子の旅、善財童子が五十三人の先生に道を求めてゆくという構成に対応していると言われています。ここで注意したいのは、問いただすのはただ一つの問いなんです。「菩提心とは云何」、その一つの問いを、五十三人に問い続けてゆくんです。この先生には「この問」、この先生には「この問」、ということではなしに、一つの課題をずっと求めてゆく。五十三人に。これが「入法界品」の善財童子の旅の内容で、この形式を借りて、『東海道中膝栗毛』はできていると言われています。

それから奈良の東大寺はご存知ですね。東大寺の大仏さん。それが毘盧遮那仏。ですから東大寺は華嚴宗。こういうふうに、いろいろなかたちで、『華嚴経』は日本文化の中に入り込んでいます。

もちろん日本ばかりではありません。およそ八世紀から九世紀にかけて建造されたという、インドネシアのジャワ島のボロブドゥール、これは立体マンダラとも呼ばれている遺跡です。その回廊には『華嚴経』『入法界品』の物語が彫刻されています。ぐるっと見て行くと、ずっと彫刻されていて、全部その物語が絵で見られるのです。ボロブドゥールに行かれたことのある方はおられますか？ 少しおられますね。僕の友達には、バリ島へは毎年行っただけでも、ボロブドゥールには一回も行っていないという人がいる（笑）。まあこれも御縁ですね。ボロブドゥールに行くと「入法界品」を見ることができます。

また敦煌の壁画の中にも、部分部分ですけど、『華嚴経』の文殊菩薩、普賢菩薩などが出てまいりますし、それから少し時期は早いですけど、龍門の石窟寺院の中にある大日如来、これは則天武后を模して造ってあるけれども、これも『華嚴経』のひとつの流れの中にある。いろいろなものが『華嚴経』の流れに入ってくる。

このように華嚴の世界は、ひとことで言えば「大きいことは良いことだ」雄大さを表している。ですから私は先生から言われました。「神経質な人は華嚴をやりなさい。神経質な人は唯識はやるな」。唯識をやって分析ばかりしていると暗くなるから（笑）。こう言われまして、それはともかくとしても、華嚴経の世界は大きい、大宇宙の世界です。ちっぽけな我々の理知・分別で計りしれない世界を形作っています。チベット等で後に盛んに描かれるマンダラ、これも元をたどれば『華嚴経』です。このように、日本をはじめ様々な文化が、『華嚴経』の文化というものの中でひとつに溶け込んでおります。

### 三 沈黙と説法

では『華嚴經』の中心テーマは何か、これも先ほど申し上げました。『無量寿經』は「本願」、『涅槃經』は「涅槃」、『法華經』は「法とは何ぞや」、そして『華嚴經』は「仏」。「仏とはなんぞや」をテーマとして、全体としては、これは六十華嚴ですけれども七処八会、三十四品から成っております。

七処というのは説法の場所です。そして八会というのは、説法の会坐、会場が八つ。初めの方で説法した場所から最後の方へ戻っていった、ひとつ重複しますので、場所は七つで「七処八会」という。こういう構成の中で、菩薩道のこと細かく説いてゆくのです。七処八会、三十四品。「品」というのは、現代風に「章」と言っても良いです。「第一章」「第二章」というときの「章」です。ですから全部で三十四章あるのです。その三十四品の中に、「十地品」とか「入法界品」とか「淨行品」とかが集められて、色々なものが組み合わされてできている。ですから『無量寿經』のような、起承転結といえますか全体的な構成があって、対告衆があらわれて、そして仏陀が説法する、という經典とは異質です。

そもそも仏陀は説法しないのです。『華嚴經』の仏陀はずっと黙っています。沈黙する仏陀の傍らに、脇待として文殊、普賢、あるいは弥勒と色々な菩薩がいて、その菩薩が説法します。それを仏陀は聞いている。これが特徴なのです。普通のお経は「阿難よ」とか、「舍利弗よ」とか、そう説き始めるのですが、『華嚴經』の仏陀は沈黙を

保っている。

この沈黙というのが、実は大事なのです。たとえば浄土三部経の場合、先ほど申し上げたように、『大無量寿経』が「真実の教」ならば、じゃあ『観経』は、『小経』はどうか、と言えば、これは方便の教です。真実とは、方便を背景として真実たりえるのです。真実は真実だけでは真実とならない。方便を背景として真実となる。そして方便も真実に照らされて初めて生きてくるのです。そういう関係のなかで、仏陀が弟子たちに語りかける。

これに対して『華嚴経』は、真理を語るのに方便を用いない。方便を用いることなく、そのまま真理を語ろうとするのです。けれども経典は最初から真理を伝えることの限界性を感じています。言葉で言ってしまうと、そのまま言葉に流されてしまう。言葉ではあらわせないほど深い真理がある。そのことを体現するために、菩薩が代わりに説いて、仏陀は黙って聞いている。そうすると、仏陀のさとりと菩薩の説法が同一になるのです。ひとつになります。それが『華嚴経』の特徴です。

そこで説かれる菩薩道というのは、菩薩の階位、段階を踏んで順々に進んで行く道で、漸・頓でいえば漸教です。『維摩経』に出てくるような、瞬間的に悟る教えが頓教。それに対して漸教というのは、「漸」ですから順番、段階がある。我々も仏教を学ぶのの一つ一つ段階を経て来た。

今日は別科の方もお見えのようですが、ちょうど今ぐらいですと、何か分かったような分からんような、先生の話がさっぱり分からんと、そんな時期ではないでしょうか。それが夏休みを過ぎてくると、だんだん頭の中に入ってくる。面白いなあ、少し学ぼうかなあ、と思いかけた時に修了（笑）。残念ながらね。で、学部の人ば、まあ三

年か四年になってからやればいいわ、と言っておったら就職活動があって、最後の土壇場で論文に追われて一気に仕上げて、勉強本当にしたのかなあと、そうなってしまいます。しかし本来は一つ一つ段階を踏んで、仏教入門、真宗入門、一般教養、そういうものを勉強して、順々に仏教を学んでゆくのです。

ですから以前の学校制度の方が良い面もありました。私が大学入った時には、一回生、二回生のときには一般教養、哲学やら倫理学やらいろんなものを学びました。仏教を学ぶのに、なんでこんなものを学ばなきゃなんのかなあ、と思いました。けれどもやっぱり仏教の背景、哲学、思想、倫理、そういうものも、とっても大事、それを学べるのは始めのうちで、専門に入ってしまうとなかなか学べない。だから一、二年の時はゆったりいろいろな勉強をしてゆく。そして三年生、四年生になったら専門に入ってゆく。これが昔の大学でしたけれど、今は最初から真宗学、仏教学の専門的な過程に入ってしまうので、善し悪しはありますが、狭くなってしまっているところはあります。ともかくそういうふうに段階的に階位、菩薩の階位を進んでゆく。菩薩の五十三階、これを一つ一つ学んでゆくのが『華嚴経』なのです。

でも我々はだいたい、学んでゆく時にすぐ「答え」を欲しがりますよね。悩んでいることがあったら、悩みが消えるような答えが欲しい。しかしそうじゃないのです。悩むことが大事だっていうのです。それは、課題を与えられる、ということですよ。「問題」と「課題」は違います。問題は一難去ってまた一難、ひとつ解いても、解けないことがまたいくらでも出てきます。そうではなくて、ずっと考え続ける課題をいただく。私は五十年前に初めて仏教を学んで、「華嚴教学に於ける信の位置」という題を先生からいただいて、五十年経った今もその課題に立って



おります。不思議なことに。悪くいえば成長していないのかもしれないけれども、それはね、三十代は三十代、五十代は五十代、六十代は六十代の知り方、分かり方があるのです。

『歎異抄』という書物を読んでいますと、若いころはそれほど感じなかったところが、この頃は一字一句、身にこたえてくるのです。清沢満之という人は、『歎異抄』は信仰の書だと言いました。一条から十条まで順番に学ぶ必要はない。言葉と出遇う感動の書である、と。この頃はそのことが、私もやっと理解できるようになりました。だから六十なら六十、七十なら七十、三十なら三十の知り方で仏教は学んでいける。真理は変わらないけど、受ける我々の状況が違ってきている。悲しい目にあったときに仏教にふれる、嬉しいときに仏教にふれる、いろんな時々によって言葉が違ってきます。この『華嚴經』の場合は、段階的に少しずつ知ってゆく、知ってゆくたびに理解の仕方が変化してゆく、ということでもあります。

#### 四 「卷舒自在」ということ

ここで『華嚴經』の成立について見てみましょう。先ほど申し上げましたように、『華嚴經』というのは最初から三十四品あったわけではないのです。たとえば「十地品」とか「入法界品」とか「淨行品」とか、そういう品は別訳、別に訳されて流布していて、後に『華嚴經』の一部になりました。ですが、長い時間をかけて流布して、複雑な事情も少し複雑ですから、どの部分がどうなのか、もともと『華嚴經』にあったものと、後から『華嚴經』の

中に入っていたものと、それがどうなっているのか、そういった詳しいことはまだ十分に明らかになっていません。長い時間をかけて流布して、長い間を置いて何度か翻訳されています。あるとき突然に出来上がって、それを誰かがあるとき翻訳して終わり、そんな話じゃないのです。長い歴史的時間を経て経典は成り立っているのです。「十地品」「漸備一切智徳経」「入法海品」「名号品」(『兜沙経』)などは、すでに別に流布していました。インドでサンスクリット本がそれぞれ独立したお経として読まれていた。そういうものが見事に『華嚴経』三十四品として構成されてゆくのです。

そして『華嚴経』には本来「恒本」「大本」「上本」「中本」「下本」「略本」の六本があったという。これはまあ、話として聞いておいていただきたい。事実云々じゃありません。神話的世界の話です。神話的な話というと、現代の人は馬鹿にしがちです。しかし神話が大事なのです。『無量寿経』に、法藏菩薩の因位の願が語られています。あれだってそうです。神話でなければ表現できないような事柄だから大事なのです。

子どもがおばあちゃんから童話を聞きますね。それが昔と今とは違うと言われています。「昔々ある所に」とおばあちゃんが言ったら、今の子は「ちょっと待って、昔々、今から何年前だ。ある所ってどこだ。はっきりしてくれ」「おじいさんとおばあさんが住んでおりました」「ちょっと待って、おじいさんは身長何メートル、性格はどういう性格。おばあちゃんはどういう性格しとるのか」(笑)。昔は当たり前、そのまま聞いていた。今はへ理屈だ。極端な話ですが、これが現代人の分別の世界です。そういうところに重きを置いてる。分かったか分からんかの世界です。ところがこちらはそうではないのです。

ですから事実云々じゃありません。伝説として、『華嚴經』には本来、「恒本」「大本」「上本」「中本」「下本」「略本」の六本があったという。「恒本」とは、われわれの心の中に思う一本一本の毛の端に、説明できないような無数の仏が説法している。しかも永遠なる時を経て、未来永劫にわたって説法が続いて休むことがない。ゆえに本頌の多少については数えられるようなものでない、というのです。これは天文学的数字です。もう塵の数ほど。よく引き合いに出されるのが「劫」という、仏典にはそういう、大きな時間が説かれていますね。「五劫思惟」とか。たとえば四十里（一里は四百メートル）立方の石を、三年に一回天女が降りてきて羽衣ですうっと擦って、それで削られてしまう年数が一劫であると。そういう話になると、これはもう分別とかそういうのじゃ理解できません。永遠に続き、そして数も無限です。宇宙ですね。宇宙的ですからこれは。それが、この『華嚴經』のひとつ、「恒本」というものです。それを背景に出て来たのが「大本」です。大本は、須弥山の大きさの筆でもって四大海水の量だけの墨で書写しても、一品すら書けない。須弥山というのはこの世界の中心にそびえている大きな山です。それを筆にして、四大海水、四方の海の海水を墨として書いても、一品たりとも書けない。これも大きな話ですね。海の水を墨にして、それで書いても書き尽くせない。大変なものです。

書き尽くせないのだから、我々に読めるわけがない。なぜこんな、読めないもののかをわざわざ言うのか。そう思われるかもしれませんが、考えてみますと、恒本と大本、この二本はまさしく量り知れない菩薩の世界のことです。私たちの分別で理解できるようなものではなく、したがって貝葉に書き写すことができるようなものでもない、ということなのです。つまり我々は、描き尽くすことのできないような世界をもっている。まあ今ではバーチャ

ル・リアリティとかいろいろ言いますけれども、こちらは形もないものを描いてゆく。私たちの心は煩惱とかいろいろなことが、次から次へと現れてくる。終わりが無い。よくそんなこと考えるな、というようなことが思いに浮かんでまいります。イメージがどんどん現れてきて、自分では想像できないような作品が作られてゆくこともあります。これが人間の持っているはたらきなのです。そういう意味で、書き尽くせない、読むこともできないなら、それじゃあ要らない、ということではありません。

次の「上本・中本・下本」の三本、これは龍樹菩薩が龍宮に行って見てきた『大不思議解脱經』、これに上・中・下の三本があったといえます。これもまだお話の世界です。「上本」は十三千大千世界微塵の偈頌、四天下微塵数の品があるという。これも数え切れない品数がある。西も東も北も、上も南も、あちこちに經典が散らばっている。それが上本。「中本」になると具体的にになります。四十九万八千の偈文と一千二百の品があるということです。ここへくると具体的になります。具体的になるけれども、まだ「大きいことは良いことだ」で、實際のこととして受けとれません。そして「下本」は十万偈頌、三十八品あるということです。先ほど三十四品と言いましたが、あちらは六十華嚴です。八十華嚴の方が三十八品あるわけですね。

で、上・中・下の三本のうち、上・中の二本はあまりにも巻数が多くて、とても衆生の所持できるものではなかったで、この地上に伝わらず、ただ下本のみ天竺に伝わったというのです。これがいま我々の見ることができ『華嚴經』です。こんな凄いものから、こんなちっちゃな、ほんのちょっと伝えただけなのだ、と。

賢首大師法蔵という、中国の華嚴教學の第三祖にあたる方がいます。その法蔵が「卷舒（けんじょ）自在」と言っ

ています。どういふことかと言うと、「巻」は巻き物ですね。巻き物は今見えているものが全てではない。巻かれている中に無尽の教えがまだある、と。いまは一部だけが出ているのであって、奥には深い、もっと沢山のものがあつたのだ、と。同時に今見えているところが明らかになれば、この巻いて隠されている奥のことも自由自在に明らかになる。これが脊舒自在、巻いて舒（の）びること自在である。この自在になっているのが巻き物なのです。

我々が得ることのできる知識っていうのは、僅かなものです。満足のゆく知識なんてなかなか得られない。荒川豊蔵さんは、人間国宝になつてもなお、「未だ会心の作はない、と言つていたそうです。人間国宝になるほど陶芸の道を歩んできた人が、会心の作はない、まだ本物は出てこない、と言つてゐるのですね。仏教でもそうです。かつたつもり。五十年学んできたお前の仏教学って何なのか、と問われたら、さあ。何にも分からないといふところもある。今まで分かつたつもりで本を書いて、論文を書いて、色々業績を積んできた、でもそれは。言葉は悪いけれど、屁の突っ張りにもならない。それがあなたの人生か。そんなことのためにあなたはこの世に生れてきたのか。

勉強が駄目という訳ではないです。勉強をしている、その學問に執着する、これを戒めているんです。「巻舒自在」。巻いてある中には無尽の教えが入っている。舒びているその先に巻かれている内容は分からない。今日お配りした資料のような紙一枚ならそれで終わりです。しかし巻物というのは、まだまだ何が出るか分からない。それは我々の想いもそうでしょう。閃きもそうでしょう。私たちの知識分別を超えた無限の感性。これが尊いものです。

## 五 善財童子と良医弥陀

まだ何が出てくるか分からない、というところは仏道と同じです。仏道を歩むということについて、『華嚴経』は出発点に重きを置いております。到達地点には重きを置かない。現代社会は結果オーライで、会社で評価される人、企業の先端をいつている人、みんな結果第一主義ですね。原因や動機はどうでもいい、結果がすべて。しかし『華嚴経』の場合は、極端に言えば結果はどうだっていい。出発点が大事なのです。そのことは「入法界品」に出てくる、善財童子の五番目の先生（善知識）、良医弥陀によく表れています。

善財童子が教えを求めて良医の弥陀という先生の所へ行ったのです。入法界品では善財童子が善知識を求めてあっちこちに行きます。出てくる善知識は女性もいますし、男性も、子供も、船乗りも、お医者さんも、それから遊女も出てまいります。それから、毎日ギロチンで処刑をしている王様も出てきます。どうしてそういう人が善知識なのでしょう。これは逆相の善知識と言われます。反面教師と言いますか、順相の善知識あれば逆相の善知識もいる。その中で良医弥陀はどういう人かというところ、お医者さんです。須弥壇はご存知ですね。お寺へ行くと阿弥陀さんが須弥壇の上におられる。そういう高座に、良医の弥陀が坐って、人々の話を聞いています。そこへ善財童子がやって来て、その下で合掌礼拝、五体投地するのです。

「わたしは菩提心を発しました。菩提心を発したけれども、菩提心とはいかなることでしょう」と、こう問う

んです。そうすると良医弥伽が「あなたは本当に菩提心を発したのですかね？」と問いますので、善財童子は一言、「然り」と言うんです。はい、本気なのです。すると良医弥伽は、壇上から降りて、善財童子を合掌して礼拝します。

先生が弟子に対して頭を下げる。これは大事なことです。私のお世話になった山田亮賢先生は「紳士たれ。そして君の論文は世界でたった一つの論文だ。私も色々勉強させてもらった」と、こうおっしゃいました。「がんばって、これから続けてゆくように」つまり、本当に心豊かな人は、弟子のことに對して頭が下がる。「よくがんばったな」、もちろん厳しく伝え厳しく学問する、それは大事ですけれども、その書いた論文に対して評価してゆく。そして駄目なところは「ここが駄目なんだよ、ここはこうするんだよ」、しかし「よくがんばった」、先生が弟子に頭を下げる。こういう世界があるんですよ、学問の世界。弟子に教えられなければ先生になれない。先生は教えるだけで、上から目線で見ているというだけじゃないのです。共に歩み共に学んで教えられるんです。ですから私もこれまで修士論文や博士論文を色々と見せていただいたけれども、どれも大したものです。よく二年、三年の間にこれだけの勉強したな。頭が下がります。しかし現実的には口頭試問しなければいけないので、「ここは駄目だ、ここは駄目だ、ここは駄目だ」と注意はしますけれども、やっぱり尊いものです。そのことが、先生が弟子に対して頭を下げる、そういうことが一つ大事なことでなかろうかな、と思うわけです。

良医弥伽は「あなたは菩提心を発したんですね」と訊ね、そして善財童子が「はい」と答えたら五体投地して善財童子を崇める。つまり『華嚴經』では発菩提心、出発点こそ尊いとされるのです。經典はそのことを「初発心の

時、便ち正覺を成す」(大正九卷、四四九頁下)という。今日から用意して明日何とかなる、そんな話じゃないのです。間に合わないのです、そんなことでは。ただちに今ってことです。だから初め発心を発したその時に正覺を成じている、悟りを開いている。

親鸞聖人は「珍しき法を広めず」と言いました。自分は別に珍しい法をつくったり考えたり広めたわけではない、そうおっしゃっています。悪人正機も、親鸞聖人の作った「珍しき法」ではなく、法然さんの書物に出てまいりますし、それから和讃を見ても、天親菩薩の偈文とか、そういうものを和讃にしておられます。この「初発心時便成正覺」ということについても、「念仏もうさんとおもいたつころのおこるとき、すなわち摂取不捨の利益にあずけしめたもうなり」という言葉に表現されていると思います。

ただこの「念仏もうさんとおもいたつころのおこるとき」について、ここには他力だけじゃなくて、自力があるのじゃないか、という考えがあるんです。つまり「念仏もうさんとおもいたつ」ということは自力じゃないか、というのですね。しかしそうじゃない。すべてが如来のはたらきである。これが真宗の捉え方なのです。そういうことも含めて絶対他力と言うのです。

『華嚴経』が「初発心の時、便わち正覺を成す」という、この場合は聖道です。自力聖道の菩薩道の世界です。それを親鸞は親鸞流に「念仏もうさんとおもいたつころのおこるとき、すなわち摂取不捨の利益にあずけしめたもうなり」、仏は取って捨てないということです。これは有り難いことじゃないですかね。捨てない。大事なことですよ。人間は人間を捨てるのです。国が違えば国を捨てます。でも仏は捨てないっていう。どこまでいっても捨て



ない。

「如来の作願をたづぬれば 苦悩の有情をすてずして 回向を首としたまひて 大悲心をば成就せり」（『正像末和讃』）これは天親菩薩の偈文ですけれども、「苦悩の有情をすてずして」、仏は捨てない、このことが我々に受けとめられるかどうかです。簡単に「はいそうです」といかないのです。疑う心が出てくる。「本当かなあ」と。しかし徹底して捨てない。こう親鸞は受けとめていったのです。

曾我量深という、大谷大学の学長をしておられた先生は「如来、我となりて我を救いたもう。如来は我なり。法蔵菩薩の降誕なり。されど我は如来に非ず」と言われました。「如来、我となりて我を救いたもう」仏の一人ばたらきです。救うか救わんかは、仏のはたらきなのです。こっちは何にもできない。ただ頼むのです。そうすると、「如来、我となりて我を救いたもう。如来は我なり」如来が私になっている。「法蔵菩薩の降誕なり」、これが『無量寿経』における法蔵菩薩の誕生なのだと。

しかし大事なのはその後です。「如来は我なり」なんですが「されど我は如来にあらず」、これが分限なんです。この分限を人間は忘れるのです。分限があるのです。この分限を誤ると、麻原彰晃のような教祖になってしまう。俺は仏のさとりを得ているから、俺の言うことを聞いたら仏教の教えを伝えるよ。そうじゃない。「如来、我となりて我を救いたもう。如来は我なり。法蔵菩薩の降誕なり。されど我は如来に非ず」、これが曾我量深先生の体得されたことです。仏は衆生を捨てないということです。我々はただ頼む、「南無」の二字で十分なのです。

## 六 訳経の流れ

先ほどは恒本・大本・上本・中本・下本・略本という伝説のお話をしましたが、実際のお話としては、現在『華嚴経』の漢訳本は三つあります。

- (一) 六十卷本（七処八会三十四品）東晋・仏陀跋陀羅訳
- (二) 八十卷本（七処九会三十九品）唐・實叉難陀訳
- (三) 四十卷本（前二訳の「入法界品」に当る）唐・般若訳

「旧訳」とか「新訳」というのは、学部の人にはもう授業などで聞かれているとは思いますが、玄奘三蔵以前を「旧訳」、玄奘三蔵以降を「新訳」、こういうふうに一応呼んでおります。それから鳩摩羅什より前は「古訳」そういう言い方もしていますね。その旧訳の六十卷本（七処八会三十四品）は、「晋訳」「六十華嚴」とも呼ばれております。仏陀跋陀羅（三五三〜四二九）が、東晋の義熙十四年、四一八年に翻訳しました。

初めの方で申し上げたとおり、私は現在『無量寿経』の翻訳について整理しております。もっとも、そのへんのこととは北海道大学の藤田宏達先生がほとんど明らかにしておられて、私らが勉強しても新しいことは何も出て来ませんけれども、その藤田先生はもちろん、今日の学会で『無量寿経』を魏の康僧鎧が訳したと考える人は、もうほとんどおりません。じゃあ誰が訳したか。一番可能性が大きいのがこの仏陀跋陀羅。『出三蔵記集』巻二に、仏駄

跋陀羅が四二一年に「新無量壽經」を訳したと出てくる。『華嚴經』の翻訳が四一八年ですから同じ頃です。「無量壽經」の中にも、「普賢の徳」とか色々なかたちで『華嚴經』に似通った翻訳もなされておりますので、これは仏跋陀羅訳で良いのではないかと私は思います。もちろん真宗では、元来ずっと康僧鎧訳として伝えられてきております。私は前の宗務総長とは同級生でしたので「これ何とかならないかい」と言ったら、「規約を変えないとまらないからできない」と言われていた。それなら、まあ康僧鎧で良いかもしれません。そこまでとやかくは言いませんが、学会ではもう通用しない話です。学問的には康僧鎧でない、ということだけは、いろいろな方向から調べてはつきりしております。

ともかくそういうわけで、仏陀跋陀羅訳の『華嚴經』は四一八年に訳されております。日本には天平八年（七三六年）に伝わってきました。それから八十卷本（七処九会三十九品）は唐の実叉難陀（六五七～七一〇）、「新訳」「唐訳」「八十華嚴」と略称します。これはですね、今から三、四十年前の学会の論文を読んでいますと、新訳とか旧訳と出ますので、今の学生さんは何のことか分からないかもしれません。これは『華嚴經』の「八十華嚴」を「新訳」、「六十華嚴」を「旧訳」、そういう風に言っておりますので、それも覚えておいて下さい。そして唐の証聖元年（六五九）の翻訳で、日本には六十華嚴と同様に天平八年に伝来しました。奈良時代ですね。

そして四十卷、これは最後の「入法界品」だけの訳ですが、唐の般若三蔵の訳で、「貞元經」「四十華嚴」と略称します。これは、東大の鎌田茂雄先生、華嚴の大家で、もう亡くなられた方ですけれども、どうしても「貞元經」を「ていげんきょう」と言われるのです。それから親鸞聖人を「上人」と書かれるとか、まあご存知なくても良い

んですけれども、我々は大事にしておりますので、お願いします、と言ったんですけれども、最後までそのままでした（笑）。これは「じょうげんきょう」と読んで下さい。唐の貞元十四年（七九八）に翻訳され、日本には大同元年（八〇六）に伝来しました。

そうすると、部分的にはもつと古く、二世紀ぐらいからの翻訳もありますけれども、この大まかな三訳で見ても、四一八年から七九八年、およそ四百年近い時間が流れている。一つの經典が翻訳されるのに。すごいですね。その間、『六十華嚴』はとっても論理的で簡潔ですが、それが『八十華嚴』さらに『四十華嚴』へと、次第に宗教性が深まってゆくように思えます。今日は内容まで深く立ち入って申しませんが、『六十華嚴』はとっても論理的で簡潔です。それが、だんだんと浄土教的色彩が醸し出されてまいります。本来『華嚴經』は毘盧遮那仏の世界なのですが、四十卷本の最後の方では「一刹那中に、即ち極樂世界に往生することを得、到り已りて即ち阿弥陀仏を見る」と言われます（大正一〇巻、八四六頁下）。時代的に見ても浄土教が広く流布してゆく頃です。浄土教は最初、中国で徹底的に叩かれます。ただ本願を口で称えているだけだ、そんなのは駄目だ、と叩かれて百年ほど沈み込んでいますけれども、曇鸞、道綽を経て善導という人が立ち上がって、そうでないのだ、ということで頑張って、善導（六一三〜六八一）から浄土教が活発になります。

しかしその後になりますと、延寿（九〇四〜九七五）や株宏（一五三五〜一六一五）といった人々が出てきて、浄禅一致、浄土と禅の融合ということを言って、念仏と禅が一緒にされてしまいます。だから浄土教といっても禅宗とほとんど変わらないことになります。ですから我々は七祖の系譜を当たり前のように受け取っていますが、天

竺の龍樹と天親はさておき、曇鸞・道綽・善導は、亜流とは申しませんが、中国仏教のなかではとても細々とした流れでした。後に晋代末期の中国で楊仁山（一八三七～一九一一）という人が『選訳集』を批判していますが、当時の中国では『論註』や『安樂集』や『観経疏』も手に入らなかったくらいです。それを南条文雄という人が日本から送られて、楊仁山も読んで納得して、しかし日本の浄土真宗の人たちは原典を読まずに、つまり『観経』を読まずに『観経疏』で解釈して、『大経』を読まずに『論註』で解釈している、そういう批判をしておりました。それも考え方で、確かに言われてみれば我々も、本当に經典を読まずに論書で論文を書いてきた部分も、なきにしも非ずです。そういう点は楊仁山の批判を受けとめなければならないと思います。

## 七 おわりに 華嚴宗列祖

だいぶ話が逸れてしまいました。最後に華嚴宗の流れをご紹介しますと思います。「宗」という言葉は、もちろん日本でも「天台宗」とか「浄土宗」とか言いますけれども、ここでいう「宗」とは、どの宗派に所属するかというセクト的なものでなしに、「どの教学を学ぶか」という教えによる「宗」のことです。華嚴宗の初祖は杜順（五五七～六四〇）という人。この人はどういう人か、あまりよく分かっておりません。次が智儼（六〇二～六六八）、この方は初め『摂大乘論』を学んだという人で、華嚴の第二祖です。三祖の法蔵（六四四～七一二）に至って、則天武后の保護のもとに隆盛を極めた。一種の宗教的天才ですね、この人も。大したものです。それから第四祖が澄

観（七三八〜八三九）で、第五祖が宗密（七八〇〜八四一）。この頃になると、華嚴の教えと禪の実践が融合していった、澄観にしても宗密にしても、今ではどちらかと言えば禪宗の人たちに多く研究されています。浄土真宗で澄観を研究する人は少ない。

日本では天平十二年（七〇四）に新羅の審祥という人が、金鐘寺の良弁の願いによってはじめて『華嚴経』の講義を行った。で、聖武天皇の発願によって大仏ができていったのです。しかしこの大仏建立に関しては庶民の人たちは大変な苦勞をして、そして人柱ではないですけども、女性の人が生き埋めにされたり、様々な犠牲を払って大仏が開眼します。そこには国家安泰という一つの願いがあったわけなのです。

それから、少し時代が遅れて鎌倉時代になりますが、もう一人『華嚴経』の世界を受けとめていった人として外せないのが梶尾の明恵上人（一一七三〜一一八〇）です。この方は、ちょっと卑近な言い方で恐縮ですけども、日本のお坊さんで本当に童貞であったのは明恵であろうと言われています。あとは奈良のお坊さんも、天台のお坊さんも、夜になったらあっちこっち酒を飲み、或いは女性を買いに出かけていった人もいたようです。ずいぶん裏と表があったみたいですが、でもそのなかで明恵だけは潔癖。それで木の上に登って、耳を切った。激しく性欲が催してくるので、耳を切って血を出した。それくらいの人です。また、天竺まで行くのに一日だけ歩いて何年かかっているのか、行けないのか、そういうことまで考えたりして、明恵はやはり純粹な人でありました。

この方は『華嚴経』をとことん読んで、菩提心というものをとても大切にしました。そうしたら法然上人が、菩提心は要らない、要らないとは言わないけれども、あまり問題にしないものですから激怒しました。念仏を称えて

往生するという法然上人の『選択集』が気に障ってしかたがない、それで『摧邪輪』という書物を書いて徹底的に法然を批判します。

ただ、思うのですが、もちろん自力の菩提心という捉え方もあるけれども、『華嚴経』には「聞名」ということも出てまいります。「聞名」つまり「名を聞け」ということです。「称えろ」ではなくて、仏の名を聞け。南無阿弥陀仏の念仏を聞け、教えを聞け。菩提心で段々修行してゆくはずの『華嚴経』が、一方ではそういうことを言っている。聞名。これはもう浄土教です。

たまたまですが、明恵上人と親鸞聖人は、生まれが同じ一一七三年、同い年なのです。それが一方は『華嚴経』から始まって聖道門の自力で、もう一方は他力の浄土門。明恵上人は法然上人を批判して『摧邪輪』を書きましたが、親鸞聖人は横超の菩提心を解釈してまいります。しかし、法然は徹底的に批判されましたが、親鸞聖人を批判するということはあまり明恵のなかからはできません。それで佐々木月樵という先生が、絶対他力こそ浄土真宗の眼目ですけど、「華嚴の浄土は半自力半他力でどうでしょう」自力聖道の世界から他力回向の世界へと転入してゆくときに、これをあまりはつきり分けて、聖道は駄目だとか、他力は駄目だとか、そうではなくして、半自力半他力でどうですか、と述べておられます。

はじめの方で『華嚴経』というのは「大きいことは良いことだ」という大きな宇宙だ、と申し上げました。真宗学のみなさんにとってはあまり馴染みがないでしょうが、あれかこれか、どちらを取るかで神経質に悩んでおられるような方は、ぜひ『華嚴経』を学んでみてください。世界が広がっていきます。まあそんなことで、いただ

いた時間がまいりましたので、終わらせていただきたいと思います。ご静聴ありがとうございました。

\* 本稿は二〇一八年六月七日に開催された同朋大学大学院文学研究科特別講義の内容を編集したものです。